

---

# ひとめぼれ

ゆいか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひとめぼれ

### 【Nコード】

N2459Z

### 【作者名】

ゆいか

### 【あらすじ】

普通すぎる女子高生みあ。

男には興味がなかったはずなのに

一瞬目が合っただけのはずのヤンキー秋斗に興味を抱き・・・

キミの瞳。 - みあside -

私、須藤みあはすんごく普通の女子高生。  
ん〜どれ位かって言うとなんか普通。  
え？こんなに普通な人居たんだ。  
って感じかな（笑）

「ふああ〜．．．ん．．．え?!」

うん。もうお分かりだろう。

私はたった今遅刻をした。

え？なんでたった今かって？

それはただ今、8：40。

学校ではちょうど担任が「席につきなさい」なんて  
誰も聞いてないこと言ってる頃だな．．．うん。

遅刻してしまったらもう慌てたりしない。

だって無駄じゃん!!（笑）

「悠おはよ〜．．。」

「おはよ．．．ってお前まだ行ってなかったの?!」

「寝坊したのさ（笑）」

「したのさ、ぢやねーし！送ってってやるから早く準備しろよ。」

悠は5歳年上のお兄ちゃん。

いまは21歳．．．かな？

「はあ〜い。」

ちよつと年が離れてるからかな？

悠は私に甘い。

見た目いかついのに、なんか面白い。

「悠〜準備万端です!!」

「お前さ、髪どんだけ頑張っても無駄だつて。」

「あ．．悠、今から車の免許もらつて来て。」

「イヤ、無茶言うな。」「はい。」

悠はバイクの免許しか持つてない。

ヘルメットかぶるし、風で巻きもとれるし、

うん、私の30分はなんだつたんだらう。

「お前落ちんなよ?」「もう慣れたで大丈夫。」

絶対近所迷惑だらうな、つて音を出して走り出した。

着いた。．．でも授業中に教室に入るのだけは避けたい。

でも悠の瞳は、今すぐ教室行け。つて言つてる。

「ありがとね。い、行つてきまゝす．．。」

悠はまたすごい音を出して去つていった。

うわあ．．．いろんな教室からバイク音を聞いた生徒が

物珍しそうにこつちを見ている。

．．．さあ、どこで時間を潰そう．．．。(泣)

かと言つて、そんなに時間があるわけではない。

「はあ、なんで送ってくれるのに起こしてくれないんだらう．．。」

悠への不満をつぶやきながら近くの公園まで歩いた。

公園の自動販売機でお茶を買った。

ベンチに座つてお茶を一口飲んだ。

「暑いなあ〜」

もう7月だ〜。

部活もやつてないし、特に趣味とかないから土日はほとんど時間の感覚がない。

そのせいか、高校に入学してから時間の経過がとても早く感じる。

夏休みもあと少しのとこまで来ている。

そろそろ彼氏も欲しい季節だな．．．

夏祭りも花火も海も、友達とだつて楽しいよ?

でも、やっぱり彼氏と見たい年頃なのさ(笑)

「そろそろ行くかな。」

遅刻した時つて教室に向かう足がすっごい重い。

教室に入ったときのみんなの視線を考えると、

こころなしか頭が痛くなってきた・・・

なにを思っても進み続けた足は教室までつれてつてくれた。

「ふう〜！」

放課でざわめいているはずの教室はこんな日に限って

わりと静かだった。

ガラガラッ

思い切つて勢いよくドアを開けた。

「みあ〜遅いよ〜」

「ごめん〜寝坊した(笑)」

杉山桃花は高校で一番最初にできた友達で、

すんごくかわいい。

容姿もだけど、とにかく天然なことか仕草とかthe女の子って感じだね。

「みあ偉いねえ〜千晴なら絶対休んでる!」

イヤイヤ、自慢することじゃない。

峰千晴は中学校からの友達。

口下手で、のわりに思ったことは誰にでもぽんぽん言う。

顔立ちはきれいなんだけど、その性格のせいで千晴をよく思う人は少ないけど、

友達を絶対に裏切らない。そんな千晴が大好き。

「みあ〜今日悠くんに送ってもらったんだね〜いいな〜。」

桃花は悠のことが好きらしい。

私的には気まずいからやめて欲しいんだけどね。

「あんまよくないよ〜髪かなりひさん(泣)」

「ホントだ!みあの髪おもしろい!」

なんて話してたら授業開始のチャイムが鳴った。

私の席は窓側の後ろから2番目。

お気に入りの席。なんでって、退屈しないから。

外を見れば空もあるし、グラウンドも見える。

人間観察が好きな私には、特等席。

「．．．いいか？テストの範囲今のうちに言っとくからな？」  
やる気のない先生の声はもう聞き飽きた。

「はあ．．．．．」

あ、誰か登校してきた。

誰だろう．．？先輩かな？

制服を着崩しているはずなのに、みっともないと言っよりかっこいい。

髪．．きれいな金色．．。

．．．って、あれ？校則で髪って染めちゃだめって．．

あ、ヤンキーなんだ。

そう思ったとき、目が合ってしまった。

こう言っときの人間の反射神経ってすごいよね。

気づかれたか気づかれなかったか分かんないけど、

目が合ったのは一瞬だった。

でも私の脳裏には強くて鋭くて、どこか寂しそうな目が残っていた。

私は初めて男の人に興味がわいた。



「きり〜つ。 礼。」

いつのまにか授業は終わっていた。

千晴は彼氏と弁当を食べるのでこの時間は桃花と2人きり。

「おつ弁当〜おつ弁当〜」

桃花あの人のこと知ってるかな？

「てかさ、この学校の金色の髪の怖い感じの人・・・」

「真田秋斗先輩？」

・・・やっぱ有名なのか。

「秋斗先輩がどうしたの？」

「いや、さつき目が合っただけだよ。」

「秋斗先輩イケメンなのに彼女作らないんだよ〜カッコイイ！」

「へえ〜」

確かに整った顔してたな〜。

んまあ、私には関係ないけどね。

帰りのSTが終わり、桃花と千晴と帰ろうとしたら担任に呼び止められた。

「みあ〜ちよつとおいで〜？」

なんか悪いことした？！・・・あ、今朝のことか。

2人には「ごめん、先帰ってていいよ！」と言い残して担任のところに走った。

遅刻の理由とか、バイクの持ち主は誰か、とかいろいろ聞かれた。でも全部話したら「次はもっと静かに来なさいよ〜」とだけ言われて、



とくに叱られはしなかった。  
その代わりに掃除やらなんやら雑用をかなりやらされた。

ふと時計を見ると7:43をさしていた。

「暗いし...。」

ケータイを見ると何件か着信があった。見なくてもわかる。  
120%悠だ。

「帰ろ...。」

かばんを持って誰もいない廊下を歩いた。

少し暗いだけなのに昼間と全く違う場所のように思えた。

「せんせえゝかえりませう。」

とだけ職員室に声をかけ昇降口に向かった。

暗い夜道は嫌いじゃない。

昔っから暗いとこや狭いとこは好きだった。

だから昼間よりも好きなくらい。

「帰ったら悠に叱られるな...。」

悠は私の親代わり。のつもりで私をいつも守ってくれる。

もうそんな年ぢやないんだけどね？（笑）

でもすごく感謝してる。

ママは私がまだ小3ぐらいで家を出ていった。

ママが出ていった原因はパパ。

仕事でなかなか家に帰って来ないのと、浮気をしていたから。

今は悠と私のために仕事を頑張ってるらしく、

なかなか家には帰ってこない。

仕事で帰ってこないなんて今さら信じられないんだけどね。

「はあ...。」

私の住んでる町に一つだけあるゲーセン。

昼間は安全なんだよ？

だけど夜にはヤンキーのたまり場になる。

今日だって．．．5、6人くらいのヤンキーがたまってる。

こう言う時はなるべく存在感消すのが1番！

早足で通り抜けようとした。「ね〜ね〜。」

ビクッ！

お、おかしいな．．．？今日の運勢2位のはずなのに．．．。

「あ．．．はい？」

．．ん？この人どっか見たことがある気が．．．

「やっぱみあぢゃーん！」

「え？」

誰だっけ．．．？

「え？つてまさか忘れられてる？！同じクラスなのにな〜」

同じクラス．．．？．．．．．！！！！

「あ！新崎一輝くん？」

「そ〜だよ〜！忘れんなよ〜」

「ご、ごめんね？」

「ぜんぜん！てか今帰り？」

「え？あ、うん！」

早く帰らないと悠が．．．

「一輝〜誰だよその子〜」

ヤンキーの集団が冷やかしてくる。

その中に1人黙ってタバコ吸っている知ってる顔があった。

明るくて艶のある金色の髪。

整った鼻、口。

どこか忘れられない瞳。

．．．秋斗先輩だ。

「み〜あ〜？どした？」

あ、いけないいけない！

「ゴメンね？私門限あるから帰るね！」  
気づいたら一輝くんにそう言って走り出してた。  
門限なんてとっくにすぎてるのに……。

「ただい……」

「おかえり。」

げっ！悠……

「どこほつつき歩いてた？」

「ちがうからね？悠のせいで担任に雑用させられてたの。」

「人のせいにするなよ。」

「悠のポンコツバイクがうるさいから注意されたんです」

「元はといえばお前の寝坊が悪い。」

う……。

「明日からは気をつけます……。」

「飯できてるから、着替えて降りて来いよ。」

「はい。」

悠のごはんとか久しぶりだな。

いつもは私がごはんを作っている。

でもたまに私の帰りが遅いときとかは悠が作ってくれる。

あんまり上手とはいえないけど、私は昔っから悠の料理が好き。

作るのはいつもカレーだけだね（笑）

「今日もおいしい！」

悠は照れくさそうに私から目をそらした。

食べ終わって部屋に戻ってケータイを開くとメールが来てた。

『みあ〜（^^）／／』

一輝くんからだった。

あ、私アドレス教えてたんだ。

『どうしたの？』

『ちよっと会わない間に可愛くなったね』

こんなに分かりやすいお世辞なんてないと思う。

『そんなことないよ（泣）』

『てかさ、みあ彼氏いんの？』

彼氏って言葉を聞いてなぜか秋斗先輩を思い出した。

『いるわけないよ』（泣）』

『そうなんだ〜！ぢゃあさ、俺と付き合わない？（笑）』

ん？ヤンキーってこう言う冗談よく言うのかな？

『冗談やめてよー！（笑）』

『冗談じゃないよ？俺、みあが好き。』

思考回路がグチャグチャだ・・・

なのにまた頭には秋斗先輩が浮かんだ。

『返事は今すぐじゃなくていいから。』

そうメールは続いていた。

私は気まずくってメールをかえせないまま次の日を迎えた・・・。

「．．．だりい。」

つか、眠みい。

「昨日ちよつと騒ぎすぎたな。」

学校なんて行く気はなかった。

星矢からしつこくメールが来なかったら

今頃俺は家でテレビでも見てる。

うるさい親は俺にはいない。だから楽。

『秋ちゃ〜ん！おはよ 星矢くん、秋ちゃんを待ってるから〜！』

『秋ちゃ〜ん！まだ〜？早く学校きてよ〜！』

『秋ちゃ〜ん．．．僕寂しい．．．』

朝っぱらから何件返信の来ないメールしてんだよ。

どんだけ暇なんだよ。

星矢とは物心ついた頃からずっと一緒にいた。

どんだけウザい事してきても、

こいつは俺の大事な連れだ。

世間のやつらは俺たちを偏見の眼差しで見ない。

それは仕方ないことなのかもしんねえ。

一般的に言う俺たちは“ヤンキー”だから。

普通のやつらは近寄ろうともしない。

親だつてそうだった。

だから一人暮らしを始めた。

センコーだつて俺らにはなんも言つては来ない。

ありがたいつちやありがたい。

校門の前に着いた。  
星矢に『来た。』とだけメールをして校舎に向かい歩いた。  
改めて校舎を見て思った。ぼろいな。てか汚ねえ。  
ある一つの窓で視線が止まった。

誰かがこつちを見てる。

黒い綺麗な髪をした女だ。

肌がすげえ白い。

その女はめが合った瞬間はつとしたようにそらした。  
なんか、気になる。

その気持ちのまま星矢達の待つ屋上へ向かった。

「秋ちゃん！やつと来てくれたね〜！」

「お前、秋ちゃんって誰だよ。」

「秋ちゃんは秋ちゃんでしょ〜？」

こいつ、ふざけてるな。

俺は軽く星矢を殴った。

「秋斗遅えーよ。」

この日は珍しく恭介も来ていた。

「お前が来てるなんて珍しいな。」

「今日たまたま暇だったんだよ。」

こいつは女遊びばっかしてる。

朝も夜も平日も休日も関係ねえ。

ずっとだ。

「お前が女絶やすなんて珍しいな。」

「そんなんじゃないよ。」

「恭ちゃんは五股がばれて、今日予定していた女の子にビンタさせられたって！」

自業自得だな。俺は涙が出るくらい笑ってやった。

「今日このあと一輝たち呼んで遊びに行くよ〜。〜。」

またか。

遊びに行くって、どうせあそこしかねえんだろ。

「ゲーセンにー!!」

やっぱりな。

「俺はパス。」

こつこつというのは早めに断つとくのが一番。

断るのは直前になるにつれてめんどくなる。

「秋ちゃん。今日断るのは許さねえよん?」

は?今日はって...あゝ今日は星矢の誕生日か。

「わかったわかった。」

自分の誕生日を自分で率先して祝うのはどうかと思うがな。

そのまま屋上で少し星矢達とばか笑いしながら時間を潰して、ゲーセンに向かうことにした。

ゲーセンに着き、テキトーに遊んでたら一輝たちが来た。

「星矢くん遅れてすいませんッ」

一輝は中学からの2コ下の後輩。

「おせえーよー!!」

一応同じ高校けどこいつはバイトばつかで本当に見ない。

「すいませんッ今日もバイトで...」

こいつはチャラけてはいるが、礼儀もなってる。

すげえいいやつだと思う。

星矢にペコペコしてる一輝を笑いながら外に出た。

とくにすることもねえ。

座ってたばこを取り出して火を付けた。

もう暗くなってきた。

「あー!!」

急に一輝が立ち上がり一人の女のもとに走っていった。

何話してんのかは聞こえねえ。

でもゲーセンの電飾で照らされた女の顔には見覚えがあった。

今日目が合った女だ。

困ったような戸惑ったような女の顔にトクンと胸が鳴った。  
周りのやつらはひゅーひゅーとか言ってる冷やかしている。

一輝の女なのか？

あれ・・・？俺、なんで嫉妬してんだ？

するとまた一瞬女と目が会った。

透き通るような白い肌。

ピンクの小さい唇。

すぐ折れちまいそうな腕。

包めそうな小さい体。

そして黒く艶のある髪。

女は目をそらすと走って行ってしまった。

俺、そんな怖いかな？

一輝はその女を見送って戻って来た。

星矢がニコニコしながら一輝に聞いた。

「あのコ誰だよ？」

一輝は少し顔を赤くした。

やっぱ、付き合ってるのか？

「そーゆうんじゃないですよ？高校のクラスメイトです。」

・・・あれ？俺、安心してる？

「でも・・・」

そのまま一輝は続けた。

「こんなにかっこ悪いんですけど、俺、アイツのこと好きなんです。」

周りのやつらは一輝を冷やかし続けた。

俺はそれでもあの女のことしか頭になかった。

俺、がらにもなく一目惚れしたのか？

「んで、あのコ名前なんて言うんだよ。」



「みあです。須藤みあ。」

みあ．．．。

「悪い。俺帰るわ。あ、星矢、誕生日おめでと。」

そのまま俺は家に向かった。

「よし！」

今日はなんか早く目が覚めた。

私は着替えてキッチンへ向かった。

「行つてきまゝす」

悠、まだ起きてないけど今日は時間早いしほつとこ。

ごはんも弁当も作つといたし、文句はないよね？（笑）

．．．にしても今学校に行つたら早すぎるかな？

学校までは歩いて40分くらい。

自転車でもいいらしいけど、歩きの方がすき。

いつもは7：50くらいに家を出るけど、

この日は6：30少し前に家を出た。

部活やつてる人たちと同じくらいの時間かな？

何か新鮮だな．．．

まだ人の少ない道も公園も。

校舎なんか時間が止まつてるように感じる。

「はあゝやつと着いた」

自分の席に腰をおろした。

電気をつけるのがもったいないくらい外の光がきれいだった。

グラウンドでは野球部が練習してる。

吹奏楽部のきれいな音色も聞こえてくる。

なんか、こつゆうのいいな。

ガラガラッ

え？もう誰か来ちゃったの??

「え？なんでいんの？」

わわ!!今一番会いたくなかったひとだ・・・。

「あ、今日たまたま早く起きちゃって、たまにはいいかなと思っ  
て・・・一輝くんは?」

「俺は・・・別に・・・」

「そ、そうなんだ・・・」

や、やばい・・・気ままずすぎる!!

こんなことなら昨日なにかしら返信しとけばよかった・・・

「あのさ・・・」

「は、はい?!」

あ、やば!声裏返ったかな・・・

「みあ、好きな人いんの?」

好きな人・・・?

「い、いません・・・」

いない・・・。

いないはずなのに胸が痛んだ気がした。

「そ、そっか。」

どれ位かわかんないけど、長く感じる沈黙が続いた。

「あ、俺バイトあるから。じゃあな」

「うん、ばいばい」

やっとこの空間から開放される!

と思つてたら、一輝くんがいきなり振り返った。

「昨日のこと、俺本気だから。」

そう言つて一輝君は教室を出て行った。

一輝くん、いつもは優しそうに笑ってるのに

さつきすごく力強い瞳だった。

少し圧倒された。

それからまた時間は過ぎていつて、

教室にどんどん人が増えていった。

私の頭の中には一輝くんとなぜか忘れられない秋斗先輩がいた。

「え?!一輝くんに告られた?!」

「ちよっ!桃花声でかいつて!!」

「あ、ごめんごめん(笑)。」

その日の昼放課に桃花に一輝くんのことを話した。

「そんで、なんて返事したの?」

「それがさ...」

私は返事できなかったことも、

今朝一輝くんに言われたことも、

そして、ずっと引つかかっている秋斗先輩のことも桃花に話した。

「ふ〜ん...ぢゃあ、みあは秋斗先輩のことが好きなんだ。」

「そんなんじゃないよっ!話したこともないんだし...」

そう。秋斗先輩とは話したこともないし、たぶん秋斗先輩は私のことを知らない。

そう思うとまた胸が痛んだ。

「みあ?一目惚れって言葉あるんだよ?」

“一目惚れ”... ..

あ、そうか。

秋斗先輩に一目惚れしたんだ。私。

そう思うと全ての謎が解けた。

「桃花...?」

「なあに?」

「私、たぶん初めて男の人好きになっただ。しかも一目惚れで。」

「人を好きになるのに一目惚れとかそんなの関係ないとおもうよ?」

桃花は恋愛経験が豊富。

だからたぶん間違いなく私を見透かしてる。

私本当に好きなんだ... .秋斗先輩のこと。

「んでさ、早めにきちんと断らないとダメだよ?」

「へ...?」

「へ？じゃなくて！一輝くんのこと。」

「あ……………」

「後のばせばのばすほど断れなくなるよ？」

「…うん…わかったよ。」

私が秋斗先輩のことを好きなこの気持ちと同じくらい、

もし一輝くんが私のことを今好きでいてくれるなら。

そう考えると私は過ぎていく時間を忘れてしまっていた。

断らなきゃ。

頭で出た答えを行動に移すのがこれほど難しいのは

生まれて初めてだった。

それでも私は一輝くんの想いに答えられない。

秋斗先輩が好き。

この気持ちに気づいたから。

「クソッ!」

なんで俺はこんなにイラついてんだ？

こんならしくねえ。

つたく。どうしちまったんだよ……。

どんだけ忘れようとしてもあの女……みあってやつ顔が頭から離れねえ。

“一輝の狙ってる女。”

そう考えるとモヤモヤする。

今までいるんな女が寄ってきた。

年齢も顔も身長も、本当にいろんな女が。

でもそいつらは俺なんか見ちゃいねえ。

ただある程度顔の整った男が欲しいだけ。

そののわりには人の心に土足で入ろうとする。

だから女は嫌いだ。

そう、俺は女が嫌い。

なんであの女がこんなにも気になってんだよ……。

やべえよ！

言っちゃまったよ……。

何が

『返事は今すぐじゃなくていいから。』

なんだよ……

こんな不安なのが何日も続くと思うと

それだけで壊れそうだ。

俺こんな弱い男じゃなかったよな……？

\*\*\*\*\*

「めんどくせえな。」

桜の花びらだって目の前でちらちら舞ってうぜえ。

入学式だ？

がちめんどくせえ。

でも星矢先輩達にあいさつしないわけにはいかない。

「だりい。」

周りは親と楽しそうにしているやつらばっかで

それが俺には滑稽に見えてしょうがなかった。

親父？お袋？ばかばかしい。

俺にはそう呼べるやつらがない。

両方とも自分の都合で俺を捨てた。

だから昔っから同情に敏感で、  
されるたびに腹が立った。  
物にも人にも当たっていた。  
星矢先輩は中学ん時に荒れてた俺を救ってくれた人。  
いつもはふざけたりしてるが、  
本当はすごい人。それを知ってんのは俺だけかもしれない。  
秋斗先輩も恭介先輩もそうだ。  
俺にとっては絶対に超えられない人達。  
先輩たちに気を使わせるのも嫌だったし  
悟られるのも嫌だった。  
だから先輩達といるときはなるべく明るくしてた。  
それ以外のときはヤンキーで恐れられる俺を  
必死で演じていた。

どうせ通わねえ高校の入学式なんてだるいだけだろ。  
先輩達にあいさつして自分の席だけ確かめて帰ろう。  
そう思ってた。

クラスは・・・と。

「・・・3組・・・」

校舎には誰もいなかった。

さっき外にいたやつらは体育館で長い校長の話でも聞いているんだろ。

「ここか。」

教室のドアを開けると女がいた。

その女はこっちを向いてびっくりしているようだった。

「ど、どうも。」

女は好きぢやなかった。

だからと言う訳ぢやないけど無視した。

女は一番端の席でグラウンドを眺めてた。  
すげえ綺麗な顔してる。



俺の席はその女が座ってる席だった。だけよ。

普通の俺ならどんなやつにもかまわず言っていた。でも綺麗過ぎるこの女の横顔のせいで俺はただその場に立ちつくしていた。

外はグラウンド添いに植えられた桜が風に吹かれ花を散らしていた。

「ねえ．．．」

黙っていた女がいきなり話しかけてきた。

俺は返事をしなかったけど、女はそのまま続けた。

「君、スツゴイ疲れてるでしょ？」

何言ってるんだこいつ。

「疲れてること．．．隠してるでしょ？」

見抜かれた。

俺は完全にこの女に全て悟られた。

「は？」

無意識のうちに声が出た。

「わ！ご、ごめんね？」

こいつは悪くねえ。

「別に。」

でも初対面のやつにはこんな返事しかできねえ。

「私、みあって言います。クラス同じだよね？よろしく！」

俺、今どんな顔してんだろ。

いつも通り眉間にしわよせてんのか？

にやついてる．．．訳ねえな。

笑ってる？違うかな。

どんな顔してんだよ．．．。

目の前にいる女は瞳をキラキラさせながら笑ってる。  
俺を同情や恐怖や下心の目で見なかった女は初めてだ。  
俺はその笑顔で心のどっかのほつれがほどけた気がした。

俺はバイトで学校に行かない日が多かった。  
行った日も教室にいることはまずなかった。  
それでも遠くからみあを見ていて魅かれていった。  
連れからみあのアドも教えてもらった。

『よろしく』

なんて素っ気ないメールしかなかったけど。  
みあはたぶん俺をあんま覚えてないけど。  
俺はただ、みあにはまっけていった。  
自分を忘れるくらいに．．．．．。

\*\*\*

今日みあに会った。  
やっぱり忘れられてたな。  
でもよかった。  
新しい俺としてまたみあと向き合つことができる。  
今はすげえ怖いけど、  
みあへ気持ちは伝えれた。  
新しい俺として。



自分の中で答えが出た。  
でもどうやって伝える？

電話・・・？

うまく話せないよ・・・。

メール・・・？

そんなの一輝くんに失礼すぎる。

直接・・・？

絶対無理だな。

一輝くんは私にスキだつて言ってくれた。  
本気だつて真剣に言ってくれた。  
私をこんなに想ってくれた人初めてだ。  
これからこんなに私を想ってくれる人には出会えないかもしれない。  
い。

そしたら、私はずっと一人なのかな・・・？  
でも、こんなに想ってくれているからこそ、  
中途半端な気持ちで答えられない。  
今の私なら、人を好きになる怖さも全部わかる。  
ちゃんと答えなきや。

「よし。」

直接言おう。

そう決めたとき、今まで動かなかった体は、

勝手に動いていった。

『明日の朝、話があるんだ。』

一輝くんは今どんな気持ちでこのメールを見てるんだろ。少し胸が痛む気がした。

でも私は決めた気持ちに後悔はないと思った。少し後で、

『おう。』

と一輝くんからメールが帰ってきた。

一輝くんが私に対する想い。

私が秋斗先輩に対する想い。

違う人を想ってるのに、気持ちは同じ。

そう考えるとまた複雑な痛みが襲ってくる。

いろいろ考えてたら、結局寝れなかった。

寝れなかったのに、眠くはなかった。

起きて、着替えて、ご飯作って、顔洗って、

歯磨きして、髪セットして。

いつもと同じことしてるはずなのに、

いつもより早く終わった。

「いつてきまゝす。」

まだ寝てる悠に一応声をかけて家を出た。

昨日と家出た時間一緒ぐらいなのに、

昨日よりも静かで、空気が重く感じた。

でも自分の答えが決まっていたからか、

体はすごく軽く感じた。

ガラガラッ

一輝くんはまだ来てないか。

野球部の声も吹奏楽部の楽器の音も、  
今日は耳をすり抜けていく。  
私はずっと変わっていく外の景色を見ていた。

ガラガラッ

「あれ?!みあ早いんだね。」

一輝くんじゃ...ない。

「あ、うん。おはよう。」

時計を見るともうみんなが登校してくる時間だった。

一輝くん忘れちゃったのかな...?

時間は過ぎて行き、教室には人どんどん増えてきた。

担任も来て朝のSTが始まってしまった。

「きりーっ、礼。」

忘れられてる。

悲しいな、なんか。

いつも通り終わる。そう思った。

「今日はきちんと話さないといけないことがあります。」

担任の一言で教室がザワツツと騒がしくなった。

「え〜井下くんが今朝事故に合って、病院に運ばれたそうです。」

.....え.....?

担任は続けて話していた。

「命に別状はないようですが、みなさんも今後気をつけてくださ

い。

でも私にはその言葉は届かなかった。

私のせいだ。

朝に話があるなんて言ったから。

私のせいで一輝くんが.....

涙が出そうだった。

私の頭にはとんでもないことをしてしまったと言う罪悪感でいっぱいだった。

私は担任に一輝くんの運ばれた病院を聞いた。

最初は渋っていたが、必死に頼む私を見て、

「病院に行っても症状によって会えないかもしれないし、無理に押しかけるようなことしちゃだめだからね？」  
と言って教えてくれた。

どうしよう。

どうしよう。

もし一輝くんが大怪我だったら・・・？

もし・・・一輝くんが死んじゃってたら・・・？

そんな不安ばかりが頭をよぎる。

足が言うことをきかない。

震えて、何回もこけた。

でも痛みを全く感じなかった。

病院に着いて、近くにいた看護婦さんやお医者さんに井下一輝の名前をたくさん聞いた。

「あ・・・あった・・・。」

ドアは閉まっていた。

部屋の前には井下一輝とちゃんと名前があった。  
手が震えた。

でもその手を握り締めて、  
2回ノックした。

返事は・・・なかった。





返事がない…………。

怖かった。

怖くなったけど、逃げちゃダメだと思った。

ドアを引くとすーっと開いた。

「一輝…………くん？」

そこにはマンガを片手にただ驚いている一輝くんがいた。

生きてた…………。

そう思った瞬間腰から力が抜けた。

へなへたと座り込む私をみて一輝くんはベットを飛び降りた。

「みあ…………？なんで…………？」

一輝くんの声で我に戻った。

その瞬間涙が出てきた。

「か…………一輝くん…………わ…………私…………ごめんなさい…………ごめんなさい…………」

一輝くんはポカンとした様子で私を見ていた。

「な、なんでみあが謝ってるの？」

「わ、私がッ朝に、かッ一輝くんを、よッ呼び出したせいで…………」

「わかった！わかった！とりあえず落ち着け？」

そう言っで一輝くんは私をベットに座らせてくれた。

少し落ち着いて私はまた一輝くんに謝った。

「みあのせいじゃねーし、車の運転手が勝手にぶつかってきただけだから。」

それでも消えない罪悪感で私は一輝くんを見ることができず、ずっとうつぶむいていた。

昨日の朝より重い沈黙が続いた。

一輝くんはいきなり話始めた。

「なあ？朝聞けなかったから、今返事聞いていいか？」

今、返事なんてできる訳ないよ・・・

「その話、するつもりだったんだろ？」

そう。そうだったんだよ。

でも・・・でも・・・

「俺さ、わかってんだよ。みあの答え。」

一輝くんの切ない声に胸を握り潰された感覚が襲ってきた。

「好きな人・・・いんだろ。」

一輝くんの顔は見れなかった。

声はとつても優しかった。

でも、今きつと一輝くんは悲しい顔をしてる。

私は一回うなずいた。

一輝くんはくしゃつと私の頭をなでた。

涙が、止まらなかった。

一輝くんは黙って私が泣き止むのを待ってくれた。

「か．．一輝くん？」

「ん？」

「ありがとう。」

散々泣いた私はやっと正面から一輝くんの顔を見れた。

一輝くんは悲しく笑っていた。

「あかさ．．．」

「何？」

「ふられといてこんなんスツゲーかつこわりいけど．．．  
一回でいいから、2人で会えねえ？」

私は一輝くんの気持ちに答えられない。

だから、できることはしたい。

心からそう思った。

「．．．いいよ？．．．」

「まじで?! うっしゃー!!」

大げさに喜ぶ一輝くんを見て、

罪悪感が少しずつなくなっていくのを感じた。

「そろそろ私、帰るね？」

また悠に心配かけるし、今日は少し疲れた。

学校も早退しちゃったし、早く帰ろう。

「そっか、また連絡するな！」

「うん!じゃあね」

一輝くんに気持ちを伝えれた。

これでもうスッキリ。

．．．．．だと思った。

「かゝずきっ」

見たことのあるヤンキー達が立っていた。

「あれ〜？彼女さん来てた感じか〜？」

「お邪魔しちゃったな！（笑）」

口々に冷やかしてくる。

「やめてください！そんなんじゃないっすから。」

一輝くんが真剣に言うと言ヤンキー達は

「わりいわりい（笑）」

と、謝った。

ずっと下を見ていた私は、

「か、帰るね。」

と言いドアに向かった。

ドアの横にはだるそうに壁によりかかった、  
金色の髪の人がいた。

あ．．．．秋斗先輩．．．．。

もっと見てたい。

もっと知りたい。

もっと近づきたい。

でも足は止まってくれなかった。

横を通るときふわっといい香りがした。

部屋を出て、ドアが閉まってから、

振り返った。

秋斗先輩は、私のこと見向きもしなかった。

私は他人。

なんの感情も持たれることのない存在。

それがたまたまなく苦しい。

秋斗先輩に触れたい。

そう思った。

携帯が鳴った。

みあからのメールだった。

『明日の朝、話があるんだ。』  
だそうだ。

今朝、教室で偶然みあに会った。

正直かなり気まずい空気になった。

その空気に耐え切れず、

勝手に口が動いた。

「みあ、好きな人いんの？」

だっせ。

何言ってるんだよ俺！

もう訳わかんねえよ……。

みあは“いない”って答えた。

でも、わかんだよ。俺。

みあは好きな人がいるんだ。

みあは笑っていた。

でも一瞬表情が変わった。

初めて見る切ない顔。

俺、みあのこと苦しめてんのかな？

重い沈黙が続いた。

俺はバイトを理由にその場から逃げた。

「クソツ．．．．。」

その日は何も手につかなかった。

バイトしてれば大抵のことは考えなくて済む。

いつもはそうやって逃げ道を作って生きてきた。

それでもみあのことになるとだめだった。

俺、ちつせえな。

こんなんじゃないやもし誰かを守ろうとしても、

俺のほうが先に壊れちまうよな。

そんなことを考えていたらみあからメールが来た。

答えは分かってる。

みあから直接「好きな人がいる」って聞くのが怖えよ。

どうすればいいのかわかんねえ。

なのに指は勝手に動いた。

「おう。」

なんだよそれ。

でもこんときの俺にはこれが限界だった。

一人で生きてこれた俺のはずなのに。

女になんて興味もなかった。

連れ以外の人間が嫌いだった。

その俺が、なんで一人の女を考えるだけで

こんなに弱くなれんだよ．．．。

そんなこと考えてたら結局寝れなかった。

「だつせ。」

「ただだけ考えても、たぶんみあの答えを変える方法なんて見つからない。」

「だったら正面から受け止めるしかねえ。」

「そんなだけのこと。」

「俺も決めた。」

「みあに想いを伝えたことに後悔はない。」

「怖えけど・・・行こう。」

「それで俺は学校へ向かった。」

「道も、建物も、空気も。」

「昨日と同じはずなのに、全く違う。」

「ドンツ！！！！」

「背中に衝撃と痛みを感じたのが同時だった。」

「ツてえ・・・。」

「俺にぶつかった車はさっさと逃げていきやがった。」

「周りでは散歩中のばあや他校のやつらがじろじろ見てくる。」

「背中にはまだ痛みがあった。」

「それでも我慢できる痛さだった。」

「立ち上がって歩きだそうとした時、」

「散歩していたばあが近づいてきた。」

「お兄さん！！だめよ！！どつか怪我してたら大変じゃない！！」

「なんだよこのばあ。うぜえ。」

「今救急車呼んだから！！じつとしくのよ??？」

「さっさとうせろ。」

「言えばみあとの約束を破らなくてすんだ。」

「でも俺はやっぱり弱え。」

「みあから一番聞きたくないことを言われる。」

「その恐怖がどっかにまだあった。」



だから、これでみあから話を聞かなくて済む。  
そう考えるちっせえ俺のせいでそのまま病院に運ばれることにな  
った。

「だりい。」

することがねえ。

一通り検査されて、

「念のため明日まで入院していただきます。」

とだけ言われて、ベットのの上に放置された。

俺しかいない4人部屋だった。

あゝ暇だ。

バン！！！！

勢いよく病室のドアが空いた。

「一輝！！！！事故ったって大丈夫かよ！！！！」

幼なじみの浅野灯也だった。

「おい！落ち着けて。てかここ一応病院だからな？」

「落ち着いてられるかって！！」

はあ………。めんどくせえな。

灯也を落ち着かして異常がないことを話すと、

「ぜつてえ暇してると思って、マンガ持ってきた！」

たまには気の利いたことしてくれるな、こいつも。

こいつにも親がない。

だから、お互いの気持ちを理解し合える大切な連れ。

バカだけど、こいつ以上に俺を理解できるやつはいないと思う。

「ありがとな。てかお前学校行けよ。」

このへんで一番バカな高校だけど灯也は真剣に通っている。

なんか夢があるらしい。教えてくんねえけど。

「ただでさえバカなんだから、休んでどうする。」

「心配して来てやったのにく」とか言っすねてたけど

結局「学校終わったらまた来るな?」と言って出て行った。

灯也が置いていったマンガをめくった。

頭に浮かんでるのはみあのことだった。

俺、最低だな。

本当最低だ。

コンコン

2回ドアがノックされた。

まさかまだ検査残ってんのか?

返事はしなかった。

ドアはすーっと開いた。

み．．．．あ．．．．?

な、なんでみあが来てんだよ?

目が合った瞬間力が抜けたようにみあがその場に座りこんだ。

俺はベットから飛び降りてみあに駆け寄った。

「みあ．．．?なんで．．．?」

話しかけると、それまで朦朧としていたみあの目から涙がこぼれた。

「か．．．一輝くん．．．わ．．．私、ごめんなさい．．．ごめんなさい」

なぜかみあは俺に必死に謝ってきた。

「な、なんでみあが謝ってんの?」

驚きすぎてそれしか言えなかった。

「わ、私がッ朝に、かッ一輝くんを、よッ呼び出したせいで・・・」  
嗚咽が混じって何言ってるのかうまく聞き取れなかった。  
でもみあは自分のせいで俺が怪我をしたんだと思ってるってことは  
ちゃんと伝わった。

「わかった！わかった！とりあえず落ち着け？」

少し泣き止むとみあはまた俺に謝ってきた。

「みあのせいじゃねーし、車の運転手が勝手にぶつかってきただけだから。」

そう言ってもみあは申し訳なさそうにうつむいていた。

みあが俺に対して罪悪感がある今なら・・・

心のどっかでそんな考えが浮かんだ。

「なあ？朝聞けなかったから、今返事聞いていいか？」

俺、卑怯だな。

でももし、罪悪感でもみあが俺の隣にいてくれるなら・・・  
そう思うと口が止まらなかった。

「その話、するつもりだったんだろ？」

でも俺は、みあの気持ちを知ってる。

卑怯で、弱い俺じゃみあを苦しめていくだけだ。  
自分でも驚く言葉が出た。

「俺さ、わかってんだよ。みあの答え。」

もう、後戻りはできない。

「好きな人．．．いんだろ。」

みあの答え。

こんなこと言ったら

みあから答えを聞くことになる。

俺はうつむくみあの横顔を見ながら必死で優しい声を演じた。

みあは一回うなずいた。

壊れそうな気持ちを隠すように、

俺はみあの小さい頭をなでた。

みあは泣いた。

泣き止むのをただ俺は待った。

「か．．．輝くん？」

「ん？」

「ありがとう。」

お礼なんていわれちゃったよ。

でも悲しい気持ちより、スッキリした気持ちのが大きかった。

「あのさ．．．」

俺はこれからもまだみあのことを好きでいると思う。

だから．．．もう少しいい。みあを知りたい。

「何？」

「ふられといてこんなんスッゲーかつこわりいけど．．．」

「1回でいいから、2人で会えねえ？」  
本当、すげーかつこわりいな。

「・・・いいよ?・・・」

その言葉、告白の返事として聞きたかったな。

「まじで?! うっしやー!」

でも、会えなくなるより良かったです。

俺、やっぱりみあが好きだ。

「んで??一輝大丈夫なのかよ?!」

今日は朝から騒がしい。

一輝が事故つたらしい。

星矢に呼び出された。

「まだよくわかんないんですけど、命に別状はないらしいっす!」  
朝からこいつらもよく働くな。

「そ、そっか。ありがとな。」

「いいっすよ!」

後輩に一通り情報をもたらった星矢がため息を吐きながら戻ってきた。

「命に別状はないらしいけど...大丈夫かな。」

「ただだけお前は心配してんだよ。ちよつとは落ち着けて。」

「あ、ああ。」

「お前が落ち着いたら見舞いでも行こう。」

正直、今一輝に会いたいとは思えなかった。

でも、こんな状況でも、みあって女のことを知れるかもって期待があった。

「とりあえず腹へったんだけど」

恭介がいきなりでかい声をだした。

「俺も...」

星矢も元気のない声で言った。

「飯食いにいこ」

俺たちは近くのファミレスに向かった。

「やつべー何食おう!!」

恭介が目をキラキラさせてる。  
ガキか?こいつは。

それぞれがテキストに注文を終えると、

「このあと、一輝の連れも呼んで見舞いに行かね?」  
めんどくせえ。

でも、こんなところで断って言い訳すんのもめんどくせえ。  
だから「ん。」とだけ答えた。

「腹いっぱい!」

星矢もだいぶ落ち着いて、元のこいつに戻ってきた。

「行くか?」

「おう!」

勝手に盛り上がってる2人を横目にただ歩いた。

「星矢くん!おそいつすよ」

「悪い悪いい」

後輩は先に病院に着いていた。

「303つてとこらしいすよ?病室。」

「おゝありがとな?調べといてくれて。」

「全然いいつすよ!!」

「303...303...」

「なあ〜やつぱりナースつていいな?」

恭介はそんな目でしか女を見ない。

まあどうでもいいんだけどな。

「あ、あつた!」

ノックもしないで星矢は勢いよくドアを開けた。

「かゝずきつ」

そこには想像もしなかった光景があった。  
みあつて女と一輝が2人つきりていた。

「あれ？彼女さん来てた感じか？」

「お邪魔しちゃったな！（笑）」

恭介と星矢が冷やかしている。

「やめてください！そんなんじゃないっすから。」

一輝の目はがちだった。

だから余計腹がたつた。

「わりいわりい（笑）」

恭介たちは謝ってるけど俺はドアの隣でその光景を見ていた。

みあはずつとうつむいていた。でも、

「か、帰るね。」

と言い、こつちに向かつて来た。

一瞬こつちを見た気がしたが、気のせいかな。

みあは俺の隣をすつとすり抜けた。

ふわつと優しい香りがした。

みあが出て行きドアが閉まったあと、無意識に振り返ってしまった。  
た。

もつと見ていたかった。

でも、あいつにとって俺は他人だ。

なんとも思っただろう。

俺はあいつがすきだ。

好きなんだ。



欲しい。

俺はみあが欲しい。

そう思った。

秋斗先輩にとって私はただの他人。

そう考えるのが辛いくらい、

私は秋斗先輩にはまっていた。

一輝くんが事故に合ってから1週間がたった。

大きな怪我也なくてほんとよかった。

あれから一輝くんとは少しメールをするようになった。

今はほぼ毎日学校に来てる。

バイトは休んでるらしい。

クビにならないのかな(笑)

明日からは夏休み！

学校中休み前の独特な雰囲気にもまれていた。

「千晴はどうせ明日から智樹くん家泊まりなんでしょ？」

和田智樹くんは21歳の千晴の彼氏。

大人で頼れるお兄さんって感じの人。

「んゝたぶんね」

「いいな〜彼氏持ち。ね？桃花」

「え？私彼氏で来たよ？言ってなかったっけ？(笑)」

「聞いてないです。」

私と千晴が声を合わせた。

「あれ？そうだったっけ(笑)」

「で？誰なの？」

「たぶん2人とも知らないよ？」

「そんなことだーでもいいです。」

桃花が私たちの知らない人と付き合うなんてありえませんか。

「K学園の柴田涼って人。知らないでしょ？」

「知らない訳ないでしょ!!」

柴田涼って言ったら有名なヤンキー。

そうなんです。

桃花はヤンキーとしか付き合わない、と言うか、

ヤンキーが桃花に寄ってくるから普通の人と付き合えない。(笑)

「なんでまた柴田涼と知り合ったの？」

「なんか、この前中学の友達と遊んでたら声かけられて、

でアド交換して、メールしてたら告されて・・・」

私ならありえない話だ。

声かけられる時点でありえない。

それがヤンキーならなおさらありえない。

ありえちゃう桃花がすごいんだ。

「や、優しいの・・・？」

「それがさー!!」

あんな超有名なヤンキーが優しい訳ないよね?!

束縛とかDVとかそんなことばっかしてそうでもない・・・

「かなりかわいいんだよ？優しいし！」

嘘やん嘘やん!!!

「そ、そうなの?!」

「うん。見かけは怖いけど、かなり優男!(笑)」

「へ、へえ」

意外すぎて言葉になりませ〜ん!

でも、桃花も彼氏できたんだ。

楽しそうだからいいか!

・・・あ、夏休み1人ぼっちだ。

ふ、ふふふふ。

いーよ？別に1人花火も1人海も1人祭りも！

でも、そんなの寂し過ぎるじゃん！！

「ねえ2人とも・・・夏休みさ、彼氏に全部捧げるとか言わな  
いでね？」

高校に入つてずっと3人で過ごしてきた私にとって、  
遊べる友達はこの2人しかいなかった。

「全部彼氏とか、ほんとないから。」

「そうだよ！みあが1人遊びしそうになつたら遊んであげる」  
うん、ポジティブに受け止めるね！（笑）

「てかさ、みあは秋斗先輩となんか進展あつた？」

「なんもない。悲しいくらい。」

なんもできることないんだもん。

「なんかしなきゃ状況変わんないよ？」

桃花、そんなことはわかつてるんだよ・・・

「なにからすればいいかわかんないし、始め方わかんないよ！」  
全部投げ出したような言い方をしてしまった。

「みあさ、めんどくさい。」

グサツ！

ちよつとはオブラートに包むつてことを知って欲しいよ・・・  
でも確かにただもじもじしている私はめんどくさいと思つ。

「ほい。」

千晴に紙切れを渡された。

「秋斗くんのアド。」

「?!?!?!」

なななななななななんでえ?!

「なんで秋斗先輩のアド知ってるの?!」

「あゝうちのバカツキの連れだからね」

克希くんは、同じ高校の千晴のお兄ちゃん。

かっこいいんだけど、やっぱりヤンキー。

柴田涼よりもノーマルに近いヤンキーだけどね（笑）

てか今どき紙切れにアドレスって！ってツッコミたかったけど、

「そんななら教えてあげんよ？」とか言われそうだったから言わなかった。

「うちのバカツキもたまには役に立つでしょ？」

千晴がこんなにお兄ちゃんのことをバカツキって呼ぶのには訳がある。

千晴の兄弟は男3人、女1人で、男兄弟の一番下だった克希くんは兄弟の末っ子で、しかも妹の千晴がかわいくてしょうがなく、入学したばかりの時は毎日のように教室に来てたぐらい千晴のことが

だ〜〜い好き。

「え？でも勝手にメールしたら迷惑だ・・・」

「つべこべゆーな。」

そう言って千晴は私のケータイを開いてアド帳に登録してくれた。

「はい。」

「あ、ありがとう」

桃花は楽しそうにこっちを見ていた。

でも知らない人からメールきたら本当に迷惑だよね？

とりあえずあんまり気にしないでおこー。

でも少しだけ秋斗先輩に近づけた気がして嬉しかった。

「それでは、休み明けに人数が減ってるようなことがないように、

安全に、規則正しい生活をしてくださいね。」

先生のこの言葉で夏休みが始まった。

セミの鳴き声が聞こえ始めた7月の終わり。

夏休みへの期待だけが大きく膨らんでいった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2459z/>

---

ひとめぼれ

2011年12月28日00時49分発行